



Title	Playing in Other Time Schemes: Don DeLillo's Poetics of Non-sense
Author(s)	平川, 和
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/76607
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (平 川 和)	
論文題名	Playing in Other Time Schemes: Don DeLillo's Poetics of Non-sense (他なる時間と戯れて——ドン・デリーロの無 - 意味の詩学)
論文内容の要旨	
現代アメリカを代表する作家ドン・デリーロが、彼の21世紀以降の作品の中で「時間」に対する意識を先鋭化させているのは自明である。しかし、彼の時間表象が「詩的言語」との関係の中で論じられることは少ない。デリーロはかねてから幼児言語に魅せられている作家であるが、ジュリア・クリステヴァによれば、詩人は無意味な幼児言語のリズムの中にある種の享楽を見出すという。デリーロもまた「意味から切り離された言葉の物質性（文字の形象や言葉の音・リズム）」と戯れながら文を構築し、作家すら計り知れない言葉の「強度」を顕在化させ、そこに「審美的な享楽」を見出すタイプの作家である。 本論文は、この詩的言語とデリーロの時間表象の関係性を明らかにすることを目的とする。21世紀以降、グローバル化やテクノロジーのサイバー化によってあらゆる境界が融解し、我々の時間認識も変容している。それに応じて、デリーロの時間表象も錯綜性・抽象性を増している。また、彼がそのような錯綜的な時間世界を描く際、そこには必ずと言っていいほど詩的な要素が織り込まれている。表面的には意味をなさない詩的言語が錯綜的な時間表象と同期することで、逆説的に多義性の世界へと我々を導く可能性をデリーロは描いている。本論文では、デリーロの21世紀以降の作品を分析しながら、彼の「無-意味の詩学」を明らかにすることで、21世紀のアメリカを批評するための有効な視座を獲得することを目指す。 5章から成る本論は、各章において、『ボディ・アーティスト』（2001）、『コズモポリス』（2003）、『墮ちる男』（2007）、『ポイント・オメガ』（2010）、『ゼロK』（2016）について論じる。具体的な分析手法として、まずジル・ドゥルーズの時間を援用することにより、デリーロの時間表象の特性を明らかにする。また、彼の錯綜的な時間表象には、子供や老人といった周縁的存在の言語が深く関わっている。そこで、クリステヴァの詩的言語論を援用することにより、周縁的存在が発する無意味な叫び声や呻き声が、通常とは異なる時間相へ我々を導き、逆説的に多義性の世界へと道を拓く過程を明らかにする。このように、デリーロは無意味な詩的言語によって主体や言語秩序が解体された時間世界を発現させ、無限の意味生成過程に読者を放り込むことで、作家すら予想しえない「他なる意味」の到来を待ち続ける。このプロセス自体に、一見意味をなさないデリーロの詩的言語の「創造性」を見出すことができるだろう。 近年のアメリカでは、トランプ大統領の登場と相まって、ポスト・トゥルースやオルタナティブ・ファクトなどと呼ばれる現象が席卷している。フェイク・ニュースなどの虚構的言説が実効的な影響力を持つ現代社会において、同じく虚構としての物語を紡ぐ作家はどのような立ち位置を取るべきなのだろうか。ややもすれば、文学的言説とポスト・トゥルース的言説は、「虚構」という点において共犯関係を結んでしまう可能性さえある。一方で、その虚構性を「真実」として「絶対」化するポスト・トゥルース的言説は、ある意味、言語を原理主義的なものとして扱い、一義的でモノリシックなイデオロギーへと収斂していく危険性がある（例えば、トランプ大統領が掲げるアメリカ第一主義、それに付随する排外主義など）。それに対し、デリーロ的な詩的言語は、その意味が決定不可能であるがゆえに、多様な意味生成の可能性を孕み持つ。だとすれば、デリーロの無-意味の詩学は、虚構性という点でポスト・トゥルース的言説を反復しながらも、その固定的な意味作用を内側から切り崩し、我々を無限の意味生成の空間へと解放する可能性を秘めているのである。	

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (平 川 和)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	言語文化研究科教授	渡邊 克昭
	副 査	言語文化研究科教授	貴志 雅之
	副 査	言語文化研究科教授	畑田 美緒
	副 査	言語文化研究科教授	中村 未樹
	副 査	言語文化研究科教授	木原 善彦

論文審査の結果の要旨

本論文 “Playing in Other Time Schemes: Don DeLillo’s Poetics of Non-sense”は、現代アメリカ文学の巨匠ドン・デリーロの文学における時間意識と詩的言語の関係性に着目し、『ボディ・アーティスト』(2001)、『コズモポリス』(2003)、『墜ちる男』(2007)、『ポイント・オメガ』(2010)、『ゼロK』(2016)といった、21世紀に上梓された彼の5つの作品における錯綜する時間表象が、一見無意味とも思える詩的言語を通していかに展開してきたかを精緻に分析することにより、デリーロの後期文学の特質を21世紀アメリカの文脈に即して炙り出そうとした力作である。

本論文の卓越性は、これまでのデリーロ文学研究においてほとんど議論の俎上に載せられることのなかった詩的言語を時間意識との関係性によって捉えることにより、彼の文学が、グローバリズムやテクノロジーへのクリティックといった文脈においていかに豊かな地平を切り拓くかを綿密なテキスト分析を通じて明らかにしようとしたところにある。このような斬新な着眼点に加えて、本論文が高く評価できる点としては、ジル・ドゥルーズやジュリア・クリスティヴァを援用しつつ、執筆者の独創的な思考の軌跡を窺わせる論を巧みに展開させていることがまず挙げられる。先行研究を十分咀嚼したうえで、主要な論点を的確に抽出するとともに、議論を丹念に解きほぐし、創見に満ちた見解を導き出す手際はまことに鮮やかである。的確な引証によって十分な論拠を示しつつ、展開される明晰な論述には、首尾一貫した問題意識と説得力が備わっており、論文として非常に読み応えがある。デリーロの後期作品に焦点を絞り、彼の「無-意味の詩学」を明らかにすることで、デリーロ批評の新たな指標を打ち立て、21世紀アメリカを論じるための有効な視座を見出した点においても本論文は、博士論文にふさわしい学術的価値を有するものと判断される。

序論では、デリーロの世紀転換期テキスト『アンダーワールド』(1997)に登場するブロンジーニの思想に基づいて立論がなされている。著者によれば、デリーロが関心を寄せる「詩的言語」はクリスティヴァの詩的言語論における「幼児言語」に通底するものがあり、一見意味をなさない子供の言語こそが、「他なる現実」へと導くことがあるという、本論の基本的な視座が明確に提示されている。

第1章、“Seize the Empty Present: The Poetics of ‘Twittering’ in *The Body Artist*”では、『ボディ・アーティスト』について、「囁き」という観点から精緻な考察がなされている。本作は、それまでのデリーロ文学とは全く趣を異にする異色のノヴェラであるが、本章では、そうした政治的、社会的描写の欠如こそが、逆説的に『ボディ・アーティスト』の政治的メッセージとなり得ることが明らかにされている。ミスター・タトルは、現在という定点を欠き、過去と未来が錯綜した時間世界を生きているが、意味を欠いたまま音声のみが浮遊する彼の言葉は、物語の背景に幾度となく登場する小鳥の囁きに重ね合わせられる。著者は、ドゥルーズの「アイオーン」と「リトルネロ」という概念を参照しつつ、タトルの不可解な言語が詩的言語としての機能を果たすことにより、主人公ローレンを通常とは異なる時間相へと導き、人間存在と時間の関係を見つめ直す契機をもたらすことを丁寧に論証している。具象性を極限まで削ぎ落とし、抽象的な時間世界を実験的に描いた本作は、デリーロの創作スタイルそのものを混沌とした21世紀的な時間相へと越境させるために必要不可欠なプロセスだったという本章の結論は明快であり、説得力に富む。

第2章、“Deconstructing the Eternal Present: The Poetic Jouissance in *Cosmopolis*”においては、「永遠の現在」という非歴史的な時間世界を生き、サイバーマナーを巧みに操ることで資本主義市場の覇者として君臨している主人公エリックの秘められた願望、すなわち詩的享楽に溺れたいという願望に注目するとともに、先行研究がほとんど論じてこなかった彼の妻で詩人のエリスを焦点化し、エリックを詩的享楽へと導く彼女の役割について綿密な考察がなされている。それを踏まえ、最終的に彼女との融合を果たしたエリックが、暗殺者ベノと対峙する最終場面においてさらに

他なる時間軸を再発見することが緻密に論証されている。超スローモーションで彼の腕時計のスクリーンを移動する甲虫が、遠い過去から連綿と連なる地質学的な時間を表象しているとすれば、未来を映し出す腕時計と遅々とした歩みの甲虫を交互に見つめるエリックの現在は、未来と過去という2つの時間軸の間で宙吊りにされているという洞察は独創的であり、著者の鋭いテキスト読解能力を余すところなく示している。

第3章、“*Falling Man without Organs: The Poetics of Slow Motion*”では、9.11を描いた『墮ちる男』を扱い、スローな時間を喚起する子供の言葉遊びや認知症の老人の呻き声など、一見無意味な彼らの言語のなかに無限の意味生成を促す詩的言語の要素を見し、それらがいかに9.11で心身に傷を負った者たちの生成変化を促すかを詳しく分析している。ドゥルーズの「器官なき身体」を援用しつつ、外部と内部が交錯し合う身体性という観点から、子供や老人の前言語的/後言語的な声を敢えて前景化した先行研究はほとんどなく、デリーロが「語りの視点」というレベルにおいて、主人公キースの物語のなかに“*organic shrapnel*”のモチーフを巧みに埋め込んでいるという指摘は高く評価できる。ハイジャック機がタワーに衝突する瞬間、テロリストの視点で描かれる激突直前の機内では、加速しながら通路を転がる水のボトルがハイジャック機のスピードを物語るが、激突の瞬間と同時に語りの視点がタワー内部のキースに切り替わり、一転して彼の目には激突の衝撃で弾む椅子がスローモーションで見える。この瞬間、「我ら」対「彼ら」という二項対立の境界は曖昧になり、出会うはずのなかった自己と他者が語りのレベルでの邂逅を果たすという解釈の切れ味は鮮やかである。タワーから避難するキースが窓越しに目撃した斜めに浮遊するシャツ、タワーから死へと加速度的に「墜ちる男」、緩慢な速度で生への階段を降りていく避難者たちが織りなす描写に、デリーロが言語、身体、速度を巻き込んで展開する「流動」の戦略を探り当てた本章の結論は独自性に富み、傾聴に値する。

第4章、“*Lose Yourself in Language: The Stray Poetics of Non-sense in Point Omega*”では、俳句というモチーフに着目しつつ、『ポイント・オメガ』における超スローモーションのインスタレーション・アートと詩的言語が織りなす関係性について緻密な議論が展開されている。俳句のように3部構成の本作の第1部と第3部では、ヒッチコックの『サイコ』を引き伸ばしたインスタレーション・アート『24時間サイコ』が登場するが、そこでは極端なスロー再生によって映画が本来持っていた意味と物語性は失われ、映像内の些末な事物が「偶然の詩」として浮上し始める。俳句のレトリックを濫用することでイラク戦争の意味づけに加担した軍事顧問を描く第2部において、人類の究極的な進化の到達点「オメガ・ポイント」について雄弁に語っていたエルスターは、愛娘の謎の失踪に狼狽し、突如として不毛な「無意味」の砂漠へ放り込まれる。そこで彼の口からかうじて発せられるのは「偶然の詩」としての意味をなさない独り言であり、イラク戦争の偽りの俳人エルスターは、意味の支配を放棄することで逆説的に真の意味での詩的な真正さを手に入れることになるという鋭い結論が実証的に提示されている。

第5章、“*The Convergence Haunted by the Apparitions of ‘Divergence’: The (Un)folded Labyrinth in Zero K*”においては、人類の叡智を結集した「コンヴァージェンス」と呼ばれる人体冷凍保存施設を舞台にしたデリーロの最新作『ゼロK』を緻密に読み解いている。本章は、言語、アート、政治が互いに絡み合って織りなされるこの施設に着目し、永遠の生を標榜するこの施設に潜む全体主義的な政治性と固定的な言語システムを明快に浮き彫りにしている。未来に冷凍保存から目覚めた人間は、進化した肉体を持つポストヒューマンとなるが、彼らの話す言語は、陰影に富んだ修辞法から解放され、時間を超越した「透明な窓」として特定の意味へと収斂していく。その一方で、施設内部の謎めいた抽象芸術の意匠に言葉をあてがい、読み解こうとする主人公の問いかけは一義的に収斂することはないという指摘は斬新である。本章では、ドゥルーズの「襞」の概念を援用することにより、詩的言語に享楽を見出したジェフの語り、一義的でモノリシックなイデオロギーへと収斂しかねない未来言語の凍てついた意味作用を解凍し、収斂に潜む拡散の亡霊を可視化するという精緻な議論が展開され、執筆者のダイナミックな思考の軌跡が窺える。

結論部分では、トランプ大統領の登場と相まって、オルタナティブ・ファクト、フェイク・ニュースなどの虚構的言説が大きな影響力をもち始めたポスト・トゥルース時代にあって、同じく虚構としての物語を紡ぐ作家はどのような立ち位置を取るべきかという論点が提示され、政治のフィクション化、フィクションの政治性をめぐる執筆者の見解が提示されている。文学的言説とポスト・トゥルース的言説は、虚構という点において共犯関係を結んでしまう可能性もあるが、ポスト・トゥルース的言説は、言語を一義的で原理主義的なものとして扱うのに対して、デリーロ文学の詩的言語は、その意味決定不可能ゆえに多様な意味生成の可能性を孕みもち、ポスト・トゥルース的言説の固定的な意味作用を内側から切り崩すとともに、無限の意味生成の空間へと読者を解放する可能性を秘めているという、説得力のある結論が、本論文全体を締めくくる洞察として導き出されている。

以上のようにデリーロ批評の新機軸を提示する本論文は、主体や言語秩序が解体された時間世界を発現させる詩的言語という視座から、デリーロの後期テキストを緻密に読み解き、21世紀文学というさらなる文脈においてその特質をダイナミックに位置づけようとする野心的な論考である。ややもすると政治的、文化的な意味の探求に終始しがちなデリーロ文学の批評を、豊穡な無意味や多彩な時間意識との関係において系統だった視点から包括的に捉え直し、

アメリカ文学・文化研究の新たな準拠枠を提示した本書の意義と功績はまことに大きい。このような基本認識を共有しつつ、論文審査担当者からは以下のような質疑がなされた。「詩的言語」という言葉がアプリオリに使われているが、定義を明確に提示すべきではなかったか。そうした言語がデリーロ文学の系譜においていかなる背景から生まれ、どのように展開してきたのか。ドゥルーズの「器官なき身体」という概念をやや即物的に捉えているのではないか。時間と詩的言語の関係をより明瞭に炙り出す議論があってもよかったのではないか。ナンセンス文学の系譜においてデリーロの詩的言語の位相をいかに定位するのか。主として扱った作品を21世紀に絞った理由は何か。後半部において時間の議論がやや後退し、詩的言語に議論の重点が移行しているのではないか。しかしながら、以上の指摘は、本論文の学術的価値を損なうものではなく、達意の明晰な英文で書かれた本論文は、独創的なテーマの発見、射程の大きさ、緻密なテキスト分析、実証性に富む議論の展開により、アメリカ文学・文化研究への寄与は顕著である。

上記考査に基づき、総合的に判定した結果、本審査委員会は全会一致で、本論文が博士（言語文化学）の学位を授与するのにふさわしい論文であるとの結論に達した。